

日本キリスト教会大阪北教会  
2017年5月7日 創立132周年記念説教 牧師 森田幸男

聖書 ローマの信徒への手紙 11章36節～12章2節

11:36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。12:01 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。12:02 あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全な事であるかを弁えるようになりなさい。

説教 『神様の恵みに応え、自分を献げなさい』

◆今日は、ただいま司会者のお祈りにもありましたように、私たちの大阪北教会はアメリカから来日されたアレキサンダー宣教師の奉仕によって生み出されて132年になります。そのことについては只今の上田長老のお祈りを通してその輪郭がお分かりになったと思います。アレキサンダー宣教師は5人の子供さんを与えられましたが、長女のエラさんが14歳の時、盲腸をこじらせて亡くなられたのです。エラさんのお墓は、神戸の外国人墓地にあります。そのようなことで、この132年にわたる大阪北教会の歴史となれば大変なことですので、先のお祈り程度にしておきたいです。

◆それで今日は、只今朗読されました聖書の箇所を中心にお話したいと思います。それにしましても今日はいつも毎月第1、第3水曜を原則に中之島公園での炊き出しでお会いする兄弟姉妹が10人位来会されておられます。とても嬉しく思います。そんなことで、礼拝に不慣れの方は肩がこるかもしれません。どうぞリラックスしてお聞きください。それにしましても、わたしたちが今このようにここに数十人の者が集まって礼拝をしておりますけれども、実は、今から22年と4か月前になりますが、この近畿地方で何が起こったかと言いますと、阪神淡路大震災が起こったのです。2千数百人の人が亡くなりました。しかし、もしあの阪神淡路大震災が起こらなかったら、今日このように皆さんと、ここに一緒にいるということはなかったと思います。ですから、わたしたちが今ここに居るのは、災いと言うべき阪神淡路大震災があったので、わたしたちはここに今一緒にいるのです。そのようなことでありまして、わたしたちが今ここに一緒にいるということは、そういう災いをも含めて不思議な神様の導きと言ってよいと思います。

◆神様は災いもくだされるのです。そして裁くこともされるのです。そしてその人を自殺に追いやることもされるのです。それがわたしたちの生の人生であります。そのようなことでありまして、皆さんそれぞれも只事では人生を生きて来られたと思います。この教会の歴史は132年です。132年といえば歴史的年限のように思いますけれども、わたしはその半分以上の年月を生きて来ましたので、132年をそれほど長いとは思わなくなりました。今日お集まりの皆さんの中で一番若い人

でも30代と思いますが、30年、40年生きて来られたら、色々なことを経験されてきたと思います。一人の人が、今・ここにいるということを、振り返るならば、その人生には、本当に無限と言ってもよい経験、また出会いがあり、そのような中には、わたしたちの人生の大きな転機になるような、決定的な出会いもあったと思います。それがなかったら、今・ここにいることはなかったと思うような、経験もありますね。そして、マイナスの経験と言ってもよい、阪神淡路大震災があったので、私たち今・ここにいるわけです。ですから、神様は災いをも下されるのですが、その災いを通して、それ以上の事柄へとわたしたちを導いてくださるのです。そういう導きを、わたしたちは、神様の「憐れみ」といったり、「恵み」と言ったりしている事柄であります。教会の132年の歩みについては、今年中に、アレキサンダー宣教師の曾孫にあたるジョアンナさんの、曾祖父アレキサンダー師の伝記の日本語訳が文芸春秋から今年中に発行されます。それを楽しみに待ちたいと思います。

◆今、聖書のローマの信徒への手紙11章36節から11章2節までを読んでいただきましたが、そこに「神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」とあります。わたしはこの言葉を21歳の時に聞いたのです。このローマの信徒への手紙を書いたのはパウロという人ですが、このパウロの言葉を通して私が聞いたのは、パウロの言葉でなくて、神様の召しの御言葉でした。「あなたの体を、生きた、聖なる供え物として、献げなさい」との神様の御言葉をはっきりと聞いたのです。当時わたしは今も淀屋橋にある「日生」と云う会社に務めていました、1月4日の初出勤の帰途、バスの中で、この御言葉を聞いたのです。家に帰り、すぐに洗礼を受けた大阪西教会へ行って、牧師さんに、「会社を辞めて神学校に行きます」と伝えました。それから今に至っています。今から50数年前のことです。ですから私がこの神様の言葉を聞くことがなかったら、今ここにいることもなかったし、皆さんとお会いすることもなかったのです。一緒に礼拝することもなかった。ですから、皆さんにとっても、今日のパウロの「兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」との勧めの言葉を神様の御言葉として聞かれることを願いながら、お話しさせていただいております。

◆今日は11章の最後の言葉と、12章の最初の言葉、短い所を読んで頂きました。パウロという人はユダヤ人ですね。このロマ書の9章、10章、11章は、長いのですけれども、そこでパウロは、自分の先祖のことをずーっと思い起こして書いております。自分の先祖・イスラエルの民の歴史と自分のつまずきの人生を重ねております。パウロは熱心なユダヤ教徒でしたから、彼の目からすれば、許しがたい異端である新興宗教・キリスト教、クリスチャンの存在を許すことが出来ませんでした。それで非常な熱情をもって、教会の撲滅を計り、クリスチャンを迫害し、殺したのです。そしてやがて、それが大間違いであることに気づくわけです。今更、間違いに気づいても、つぐないがありません。自分の先祖たちのことを振り返っても、自分の人生と重なるような歴史です。そして9章、10章、11章で、その歴史をずーっと書いて来まして、その締めくくりの言葉としてしているのが11章36節です。こう言っていますね。すべてのものは、自分の人生も含め、自分の先祖たちの歴史も含め、自分が死に追いやったクリスチャンのことをも含め、「す

べてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」と。すべての事は神から出、神によって保たれ、神に向かっているのです。いろんな過ち、挫折、争い、犯罪、裏切り、ありとあらゆる負の出来事がありますけれども、そのすべてが、神から出ていると言うのです。「すべて」ですから、一つの例外もないということです。

◆皆さんも、「ノアの箱舟」の話はよく知っておられると思います。創世記の6章にこのように記されています。「06:05 主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、06:06 地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。06:07 主は言われた。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」そして40日40夜、神様は雨を降らせ、洪水は40日間、地上を覆ったのです。このように。すべてのものは神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。ですからこの世の歴史のすべても、わたしたち一人一人も、神様の御心によって、この生を与えられたのです。そして神様によって保たれているのです。そして神様に向かっているのです。こういうふうパウロは言っているわけです。

◆そして、「こういうわけで、兄弟たち、神の憐みによってあなたがたに勧めます」とパウロは言います。この歴史をすべては「神の憐みによっている」とパウロは受け止めたのですね。「憐れみ」というのは「恵み」と言い替えてもいいし、「愛」と言い替えてもいいし、「赦し」、「導き」、「顧み」、「信実」「まこと」等々、色々言い替えることができます。そして、神様が悔いて、この世界を大洪水で一掃される事もなさるのですが、それもこれも含め、すべては神様の憐れみの内にあるのです。このようなパウロの人生観、歴史観、宇宙観が、ここに表現されているわけです。パウロのキリストとの出会いは決定的でした。どうしても償い得ない過ちを犯したパウロでしたが、神はそのパウロを正にキリストのとりなしによって、赦してくださったのです。そのような経験を踏まえて、パウロは何があらうと、何が起らうと、この自分が如何に愚かで罪深い人間であらうと、神の憐みは途絶えることはないということを、パウロは悟らされたわけです。

◆先週話した事ですけれども、或る青年とメールのやりとりをしています。彼は、16歳ぐらいの時にいじめを受けて挫折し、今も入院しています。20年近く苦しんで来ました。入院している方が楽なのです。その青年から、最近、「10代の頃の自分に戻れますか」というメールが来たのです。「もし戻れたら、もう一度勉強やり直して、体を鍛えて、だんだん弱っていく母親を支えたいのです」というメールでした。それで私は「戻れます」と返事を書きました。それで、今朝もメールを開きますと、「僕は病院にいる方が楽なのです。母親を助けて下さい」と2行のメールが来ました。きっと彼は神様が助けてくださると私は信じています。

◆現状は、そういうことなのですからけれども、わたしたちの人生、歴史、世界を導くキーワードは、「神の憐れみ」です。これは私が何十回も引用する私の愛唱聖句なのですが、このローマの信徒への手紙の8章31節以下にこうあります。「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべ

てのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。」ここでも「すべて」という言葉が繰り返し出てきます。ですから例外はないという事です。

「その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」。すべてのものなのです。神様は、最善の仕方とタイミングで、その善き御業を為さってくださいなのです。そうでありますから、わたしたちは神様の絶対の愛とタイミングの中に今もあり、明日も、永遠にあります。そのことをパウロは本当に知って、12章へと書き進むわけです。「こういうわけだから、神様の憐みによって勧めます」と。

◆今日は日曜学校で、ペトロたちが、イエス様に会い、すべてを捨ててイエス様に従ったところを読みました。ルカによる福音書の5章1節～11節です。こうあります。「イエスはシモンに言われた。『恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。』 05:11 そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った」と。そこで日曜学校の子供たちに「人間を取る漁師って、どんな漁師？」と聞きました。ローマ書8章にありましたように、一人の人が再生するためには、神様はどんな犠牲も惜しまれない。独り子のキリストを十字架につけることさえされたわけです。そこまでの真実を示された神様がわたしたちの為に何かを出し惜しみをされるということは絶対にありません。その神様の愛に応えるパウロの覚悟を示す言葉が、ローマ書9章、286ページにあります。「私は「キリストに結ばれた者として真実を語り偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証していることですが、わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たちつまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」と。この「神から見捨てられた者となってもよい」というのは訳としては弱いのです。これは、「わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となることを、求め続けてきました」くらいに訳すべき表現なのです。「人間を取る漁師」とは、このような覚悟と生き様の人です。

◆そのようなことでありますので、どうぞ今日初めて来会された方も、古くからの方々も、今日、もう一度、イエス様の「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」という御言葉を、胸にしっかり受け止めたく思います。

「11:36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。12:01 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」

◆お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

各自あなたに導かれて、またあなたがアレキサンダー一教師をこの教会に導かれて、今聖書を通し、あなたの不動の憐みを御心の一端にふれることができ、感謝いたします。どうかこの身をささげてあなたに喜ばれ、また人の喜び、助けになる道を歩ませて下さい。この祈りイエス様のみ名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。